

群 教 セ	E03 - 03
	平17.227集

ともに考え活動をつくりだす児童を育てる 集会活動の工夫

— 双方向のかかわりを深める「宮二の木」の活動を取り入れて —

特別研修員 近藤 照久（伊勢崎市立宮郷第二小学校）

本研究は、集会活動の企画、修正、評価の段階に、代表委員と児童会員との双方向のかかわりを深める「宮二の木」の活動を取り入れ、ともに考え活動をつくりだす児童を育てることを目指した実践研究である。代表委員が集会活動の工夫について提案し、それに対して児童会員からも意見を出す。意見を整理して新しい活動を増やし、実施後はみんなで集会を評価することで満足感を味わい、次の集会活動へ向けた参加意欲がもてるようにした。

キーワード 【集会活動 児童会 特別活動 代表委員会 話し合い活動】

I 主題設定の理由

集会活動では学校生活を自分たちの力で改善し、新しいものをつくっていかうとする自主的・自発的な気持ちを高めることが大切である。

本校の集会活動は、年間の活動計画に基づいて、特に内容は見直しがされることなく例年同様のプログラムが行われてきている。児童の姿からは、全校で集まる意味や活動したことによる気持ちの高まりはあまり見られない。その原因としては、①児童会員の意見をくみ取り、児童がどんなことをやりたいのか話し合う過程が軽視されていた。そのため、参加する児童会員の参加意識を高めることができていなかった。②代表委員の発言や票決にクラスの意見を背負っているという意識が薄い。そのため、話し合いの雰囲気違う意見にすぐ賛成するなど、学級委員一人一人の背後にあるクラスの意志が話し合いの中に十分には反映されていなかった。③集会活動を実施した時点で全てが終わり、集会活動を各自で評価したり、参加した児童から評価をしてもらったりということは行ってこなかった。そのため、参加した児童がどういう感想をもったかを知り、発表に携わった児童が、満足感を得たり、次の活動に向けた意欲や改善への手がかりを感じ取ったりして、次の新しい企画を立ち上げようとする気持ちをもてなかったことが考えられる。

そこで、代表委員と児童会員との双方向のかかわりを深め、より多くの児童の意見を活かして活

動をつくる経験を積み重ねていくことが、児童会活動全体の活性化につながると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

集会活動をともに考え活動をつくりだす児童を育成するために、代表委員と児童会員との双方向のかかわりを深めて活動をつくる「宮二の木」の活動を取り入れることの有効性を明らかにする。

III 研究の見通し

1 集会活動を企画する場面において、活動のねらいやこれまでの集会活動のもち方を整理して振り返り、代表委員の企画案を「宮二の木」を活用して児童会員に伝えたり、児童会員の考えを集めたりすれば、自分たちで集会活動をつくるという参画意識を高めることができるであろう。

2 集会活動の企画案を修正する場面において、「宮二の木」を活用して、活動案に対する児童会員の意見を賛成、反対、つけたし、修正の4つに整理して話し合いをしていけば、みんなの意見を活かした新しい活動を取り入れた集会活動を工夫し、実施できるであろう。

3 集会活動を評価する場面において、「宮二の木」を活用して、工夫してつくった活動につい

て児童会員から感想やよかった点を集め、整理しながら話し合いを行えば、ともに考えを出し合い、新しい活動を取り入れた集会活動の楽しさ・満足感を味わい、次の集会活動への意欲をもつことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

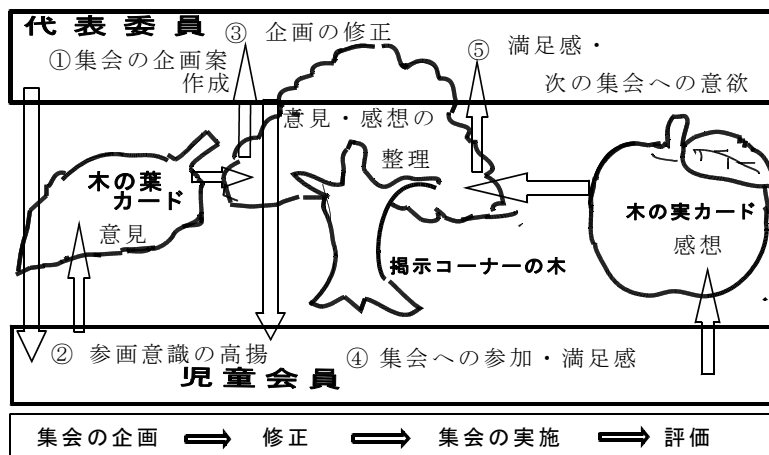
(1) 「ともに考え活動をつくりだす集会活動の工夫」とは

代表委員と児童会員が意見を交換しながら新しい企画を盛り込んだ集会活動を考えていくことである。代表委員が活動の企画案をつくり、児童会員に伝え、意見を集める。児童会員の賛成・つけたし・反対・修正といった意見をまとめていきながら、企画案を修正して集会を実施する。そして、活動後に振り返りを行い、満足感を味わい次の集会活動への意欲をもてるようにする。

(2) 「宮二の木」の活動とは

児童会員が集会活動の企画案に対して意見を書き込む「木の葉カード」、代表委員が考えた集会活動の企画案や「木の葉カード」を展示する「掲示コーナー」、児童会員が集会活動に対する感想を書き込む「木の实カード」、この3つを合わせ、校名を取り入れた「宮二の木」の活動と名付け、代表委員と児童会員との双方向のかかわりを深める活動である(資料1)。

資料1 「宮二の木」の活動の考え方



ア 「木の葉カード」とは

代表委員から提案された集会活動の企画案を学級で話し合い、自分たちの考えを代表委員に伝える

カードである。このカードはイチヨウやモミジの葉といった形状によって、「賛成、つけたし、反対、修正」の意見が一目で区別できるようにしてある。また、カードの大きさに、学級で話し合った意見を一つにまとめた大型カードと、生活班を単位として多様な意見を出しやすくした中型カード、そして、集会の感想や児童会活動への希望といった個人の意見を書いた小型カードがある。

イ 「掲示コーナー」とは

児童会員が意見を掲示し、意見が集まってくる様子を確認できるようにしたもの、木の形をした「掲示コーナー」である。児童玄関奥に設置し、児童が毎日の生活の中で目にできるようにした。児童会員から出された意見を見やすくするために、賛成する木、反対する木、これをつけたす木、ここをかえる木の4本の木で構成した(資料2)。

資料2 掲示コーナーに集まった木の葉カード



4つに分けられた児童会員の意見は、代表委員が内容の近いもの同士をまとめて整理する。そこから児童会員の意見をくみ上げて集会活動を工夫をした。

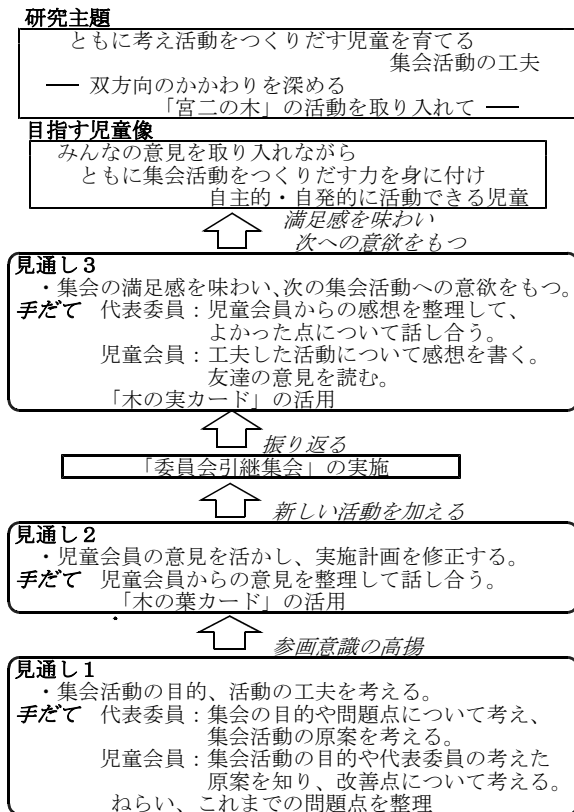
ウ 「木の实カード」とは

集会活動を行った後に、児童会員が自分たちが参画したことで集会活動がどう変わったか評価を行うカードである。リンゴをかたどったこのカードは、低学年の児童にも容易に取り組めるように、各自が色を塗ることで集会への満足度をあらわせるようにした。十分に活動を楽しめた場合には、木の实カードを赤色に塗って感想を書き加える。ここを変えた

方がよいのではないかという改善点の方が強い場合には、黄色に塗って改善に向けた提案意見を書く。児童会員は、掲示コーナーに感想や意見を貼

り互いに読み合った。代表委員は感想や意見を整理して話し合いを行い、ともに考えを出し合い、新しい活動を取り入れた集会活動の楽しさ・満足感を味わい、次の活動への意欲をもつことができるようにした。

(3) 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

(1) みんなが参加できる集会活動を自分たちがつくるといふ参画意識をもつことができたか。(見通し1)

ア 実践の概要

「委員会引継集会」を行うにあたり本部役員を招集し、昨年度及び前期委員会紹介の反省点について意見を出し合った。ここでは、まず本部役員に自分たちの考えを加えた新しい集会活動にしようという考えがもてるように話しかけた。

代表委員会では活動のねらいを確認し、これまでの集会のやり方では、何が課題かを話し合った。代表委員会の問題点としてあげたものと、新しい企画案を掲示版に整理した。単に児童会員から意見を求めるのではなく、「自分たちはこのように話し合った。その上で、みなさんからも意見をもらいたい。」という話し合いの過程をも伝えることで、児童会員からの意見(木の葉カード)の焦点

が絞られるようにした。

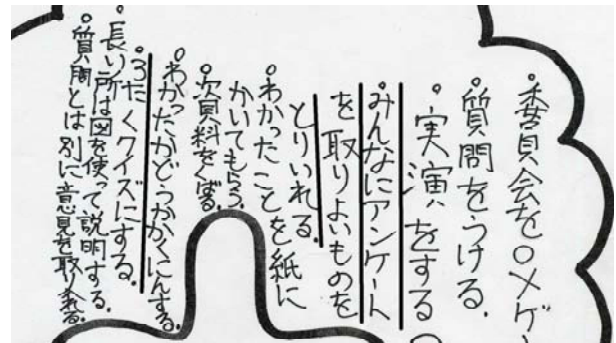
集会活動の場面で、児童会長から児童会員に「委員会引継集会」の企画案を伝え、話し合ってもらいたいポイントを伝えた。また、昼休みに掲示コーナーの前で、木の葉カードを配ったり、これまでの問題点を再度伝えたりした。そして、さらによい集会にするためにはどうしたらよいかを学級で話し合った。

イ 結果と考察

代表委員会は、これまでの集会の反省点として、①9人の話は長くて時間がかかりすぎる。②活動の様子を伝えたビデオは、後ろの方の子によく見えない。③ほとんどの人は、委員長さんからの話を聞いているだけでつまらない等の意見が出た。

そこで、改善すべき点としては、「委員長の話は、ポイントを絞って短くする。」「聞いているだけではみんなが飽きてしまうので、楽しめることを入れる。」として、さらに対応策を考え、アイデアを出し合った(資料3)。

資料3 代表委員が出した改善案の記述の例



委員の一人は、新しいアイデアとして、三択クイズをするとともに、アンケートをとってみんなからよい意見を探り入れたいという案を出した。この委員は集会活動に自ら参画していこうとする姿勢と、児童会員が望む集会の活動の在り方を聞き取り、その上で集会活動をつくっていくべきだという考えがもてていると考える。

代表委員で意見を出し合ったところ、企画案としては、「各委員会の質問や意見を紹介の中で受け答えてもらう。」「各委員会から三択クイズを出してもらい、楽しめるようにする。」という2点をプログラムに加えることにして、児童会員から意見を聞くことにした。

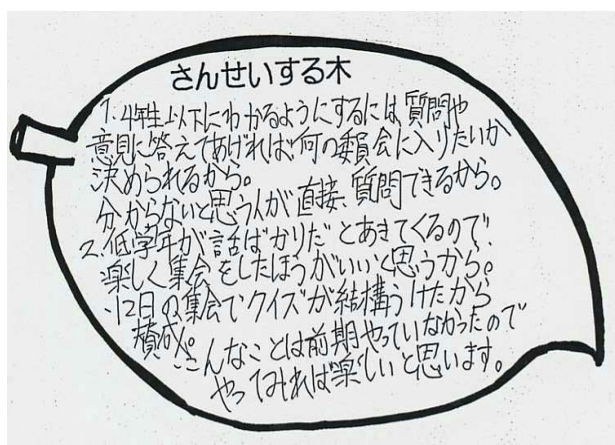
学級での取り上げ方は、学年や学級の実態に応じて選べるようにした。学級会で議論して一つの意見にまとめ「木の葉カード」に書いた学級もあ

ったが、学級の生活班ごとにまとまって話し合った結果をカードに書いた学級が多かった。「掲示コーナー」に「木の葉カード」を集めた一週間には、低学年の児童も多く集まり意見を書いていた。

資料4の「木の葉カード」は、学級の意見をまとめたもので、学級会で話し合った結果、「各委員会の質問や意見を紹介の中で受け答えてもらう。」という企画案に対して、賛成している。その理由として、この委員会引継集会には、4年生が高学年に入ったときの委員会選択のガイダンス機能があると位置づけている。このことは、委員会引継集会のねらいを考えた結果、単なる委員会紹介の場でなく、活動のつながりを考え発展的な見直しをもてた結果と考える。

また、低学年の児童にも楽しめる集会にするために、委員会からの3択クイズの実施についても賛成している。これからの委員会を引き継ぐ下級生に関心をもって集会に参加してもらいたいという気持ちをもてた結果と考える(資料4)。

資料4 木の葉カードに書かれた意見の例



児童会員の修正意見としては、「意見や質問がある人には、先に紙に書いて出してもらおう。」「話すだけでは分かりづらいので、実演を入れてもらおう。」「高学年も楽しめるクイズを出してほしい。」等の意見が挙がった。

これらのことから、活動のねらいやこれまでの集会のもち方を整理して振り返り、代表委員の企画案を「宮二の木」を活用して児童会員に伝えたり、児童会員の考えを集めたりしたことは、児童集会の目的や内容を分かりやすく知らせるのに効果があったと考えられる。また、どんな活動の工夫ができるかと考えたことは、集会活動への参画意識を高めることができたと考えられる。

(2) みんなが楽しめる集会という視点から新しい活動を取り入れた集会の工夫をし、実施することができたか。(見直し2)

ア 実践の概要

「木の葉カード」に書き込まれた、代表委員の活動案に対する児童会員からの意見を児童会室で整理して話し合いをした。まず、木の葉カードを読み合い、内容を整理していくことで児童会員が望んでいる集会活動の姿を明らかにした。

「木の葉カード」は、学級用の大型カード1枚を30人分、生活班用の中型カードを5人分として人数を割り出し、意見に重み付けをした。代表委員会の企画案に「賛成」とする木の葉カードが多いことは数えるまでもなく一目で分かった。しかし、この企画案になぜ賛成しているのか理由を読むことで、何が児童会員の賛同を得たのかみんなまで考えた。また、つけたしや、修正、反対の意見についても、代表委員で話し合いをする上で考えていかなければならないと思われることについては、本部役員にシールで印を付けて選び出した。このシールを手がかりに、代表委員で話し合う資料とするために、意味合いの近い意見を集めて集計したプリントをつくった。

イ 結果と考察

意見を整理してみると、代表委員会でもたてた二つの企画案「各委員会の質問や意見を紹介の中で受け答えてもらう。」「委員会から三択クイズを出してもらい、楽しめるようにする。」に対して、児童会員の過半数の賛成を得た。そして、修正意見としては、以下の3つの意見を取り上げて話し合った。

修正意見①「意見や質問がある人には、先に紙に書いてもらおう。」「みんなの意見を聞き取る機会を増やしてほしい。」(意見箱など)

これについて代表委員会では、「これから意見箱を作ることを紹介をする。」「今まで手を挙げて発言する機会をもった集会活動はなかった。だから当日たくさん手が挙がるとは思えない。はじめに学級委員が手を挙げて何人か発言したら、みんなも手を挙げるのではないか。」「それでも手を挙げられなかった人や、集会後に意見や質問をもった人のために『宮二の種カード』をつくって意見を書いてもらったらどうか。」と話し合った。この児童会員からの発言を誘う手だてや「宮二の種」というアイデアが出たことから、代表委員は児童会員の実態をよく考えて、「木の葉カード」

を活かして集会活動を盛り上げようと修正することができたと考える。

修正意見②「三択クイズは低学年用と高学年用の問題にすれば、1年生でも問題ができるし、高学年も楽しめる。」(これまでは、問題が簡単すぎて高学年がつまらない。)

これについて代表委員会では、「三択クイズは、9つの委員会から低学年用と高学年用の問題を両方出すと時間がかかるので、どちらかを委員会で選び分担して出題する。」「集会で挙がった意見や質問をクイズにして、校内放送で流したい。」と話し合った。

この低学年用と高学年用の問題を分けてつくるという修正案は、低学年でも楽しめるようにするという配慮だけでなく、全学年が楽しめる集会をつくりたいという児童会員の意見が活かされた結果と考える。

修正意見③「実演をすると分かりやすくなると思う。話だけだと何をしているのか分からない子が出てくる。」「少しずつでも低学年の子にこれから委員会を体験してもらおうと分かりやすくなる。」

これについて代表委員会では、「劇をすると分かりやすいけれど、委員会引継集会まで1週間しかないので練習ができない。」「委員会で使っている物を少し見せて実演する程度にしたい。」「低学年にも分かるように何人かステージに上がってもらって、体験してもらったらどうか。」「しかし、その場合うるさくなるのではないか。」そこで、今回は委員会で使う物を提示することになった。

以上のことから、資料5に挙げるように全校児童が楽しめる集会活動の工夫や改善を3つ加えることができた。

なお、当日の「委員会引継集会」では、それぞれの委員長が普段の委員会活動で使っている物、図書カード、じょうろ、バスケットボール、募金箱等を提示して活動を紹介した。物を提示したことで低学年の児童にも、何をやる委員長が話しているのか分かりやすくなった。また、三択クイズでは、低学年用と高学年用の問題をつかったことで、課題であった高学年の児童も歓声を上げてクイズに参加することができた。意見や要望を伝える場面では、質問をしてみたいという気持ちは、手を挙げようかと手をこまねいている姿や、「こんな質問はどうか。」と友達と相談する姿

から読み取れた。結果的には、予め質問を考えていた学級委員しか発言できなかったが、集会後に感想を聞いたところ、「質問の仕方や意見の言い方が分かった。」「説明だけより分かりやすくなった。」という意見が得られた。

資料5 委員会引継式の改善点

これまでの後期委員会紹介のプログラム	工夫改善した委員会引継集会のプログラム	宋の葉方二下の意見をもとに修正した部分
1 はじめの言葉 2 児童会長からの話 3 各専門委員会委員長からの話 ・活動内容 ・活動方針 ・委員会からのお知らせ	1 はじめの言葉 2 児童会長からの話 3 各専門委員会委員長からの話 ・活動内容 ・前期委員長からのアドバイス ・委員会からのお知らせ 4 各委員会への質問や意見を受け 5 各委員会からの3択クイズ 6 終わりの言葉	③委員会で使っている物を見せながら話をする。 ①まずは、学級委員が発言の雰囲気づくりに質問や意見を出す。挙手できない子のために「宮二」の種をつくる。 ②三択クイズは、低学年用と高学年用に分担して出題する。
4 終わりの言葉	6 終わりの言葉	

これらのことから、「宮二の木」を活用して、児童会員の意見を整理して話し合いを行ったことで、集会活動の企画案を修正し、みんなの意見を活かした新しい活動を取り入れた集会活動を工夫し、実施することができたと考える。

(3) ともに考えを出し合っにつくった集会活動の楽しさ、満足感を味わい、次の活動への意欲がもてたか。(見通し3)

ア 実践の概要

委員会引継集会を行った後に、「木の実カード」を使って、集会活動の振り返りを行った。「木の実カード」に書かれた感想や新たな希望は掲示コーナーに貼った。

また、掲示コーナーに集まった意見をもとに代表委員で、集会活動は成功したのか、どのような点が課題としてあったのかを話し合い、次の児童集会への改善点や具体的な対策を考えた。そして、児童会新聞に活動の様子や感想を掲載するとともに次の集会活動に向けた活動の方針を伝えた。

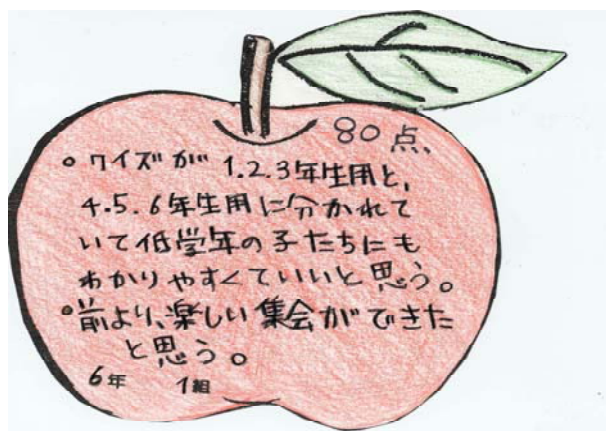
イ 結果と考察

教室で低学年の児童が「木の実カード」を書いた様子を見ていた担任からは、「リンゴの色塗りは、低学年にもできるし、感想も書いていました

よ。」(1年担任)、「みんなよく考えていて、赤いリンゴの一部を黄色に塗って改善点を書いてもいいですかと質問がありました。」「2人で話し合っただけで評価したことで、よく活動を振り返っていました。」(3年担任)という感想をいただいた。

6年生が書いた「木の実カード」には、低学年の子たちにも自分たちの企画したクイズは、分かりやすくてよいという記述部分がある。自分たちの意見が活かされ、クイズを分担していったことで、専門委員会の活動が低学年にも分かりやすくなったこと、自分も集会を楽しむことができたことと満足を得たことが読み取れる。(資料6)

資料6 「宮二の実カード」にあった記述①



その他の主な意見としては、「三択クイズは楽しかった。みんなも話をよく聞いた。」「発表の仕方が分かりやすかった。」「説明が分かりやすかった。」という満足感を伝える感想が数多く占めていた。

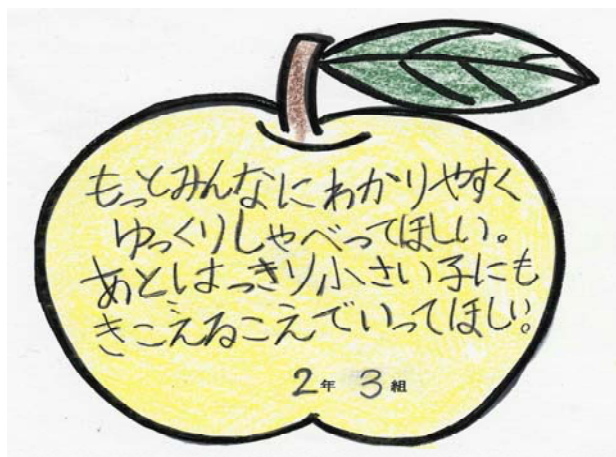
また、真っ赤な木の実や黄色の木の実が集まっていく様子を、児童会員は玄関を通るたびに目にした。掲示コーナーの前でカードを貼り付けに来た児童の様子を観察していると、自分のカードを貼り付けてからも、他の子のカードを友達と読んでいる姿が見られた。

代表委員会では、これらのカードを全て児童会室に掲示して、意見を整理しながらよかったところについて話し合った。ここでは、単に感想を書いてもらい掲示するのではなく、意見を出した児童会員も集会を企画した代表委員も、集会が成功した理由は何だったのか、「宮二の木」に集まった友達のカードを読んで、考えるようにすることが大切であると伝えた。ともに考えて意見を出したことで、新しい企画の入った集会をつくることができたという満足感をカードを読むことで味わ

った。

集会活動の改善点を指摘したカードには、「声が小さく聞き取れないことがあったので、みんなが分かりやすいように劇などにして見えるようにしてほしい。」「クイズは盛り上がるけど、うるさくなる。」という意見があった(資料7)。

資料7 「宮二の実カード」にあった記述②



代表委員会では、上記のような意見も謙虚に受け止めた。当日発表した委員長から、「次は発表の練習をもっとしたい。リハーサルをしっかりとがんばります。」と、代表委員会の中で発言が見られたことは、「木の実カード」によって自己改善の意識が高まったためと考えられる。

低・高に分けて三択クイズを考えたことで集会活動が盛り上がった。学級委員以外からの意見は出なかったが、意見や要望について全校児童の前で話したことは、委員会活動について考えてもらうよい機会になった。「宮二の種」を書いてもらったことで、児童会員が各専門委員会の活動として何を求めているか分かった。木の葉カードを読むことで成果を確信し、同様の木の葉カードが何枚あるかとカードを指折り数えている姿を見ると、木の実カードを取り入れたことは代表委員の満足につながったと考える。

そして、次の「豆まき集会」については、「これまでは、各教室でクラスごとに行っていたが、全校で集まる会に変えていきたい。」という意見が多く出された。具体案として、「自分たちが鬼になるので、みんなに広い校庭で豆を投げてもらいたい。」「三択クイズが楽しかったとみんなが書いているので、豆まきにちなんだクイズを出すことをはずせない。」「僕たちで、豆まきの劇かビデオをつくらう。」などの意見が出された。こ

これらの意見は、委員会引継集会をみんなの力で変え、みんなの意見を集めて集会活動をつくりだしていくことへの手応えを感じたためと考える。

以上のことから、「宮二の木」を活用して、工夫してつくった児童集会についての児童会員の感想やよかった点を集め、整理しながら話し合いを行うことで、集会の楽しさ・満足感を味わい、次の活動への意欲をもてたと考える。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

集会活動において、児童会員からも広く意見を求め、代表委員とともに双方向で考えを出し合う「宮二の木」の活動を取り入れて、話し合いを進めることで、進んで集会に参加できるような活動の工夫を考えようとする児童の姿が見られるようになった。代表委員からの企画案に対して、児童会員は意見を「木の葉カード」に書き、代表委員が集めた意見を整理したことで、みんなの望む集会にはどんな活動の工夫があるとよいかをつかむことができた。また、みんなで工夫して集会活動をつくった感想を「宮二の実」として掲示したことは、集会活動の達成感を味わい、次の集会活動へ向けた参加意欲をもつことに役立った。

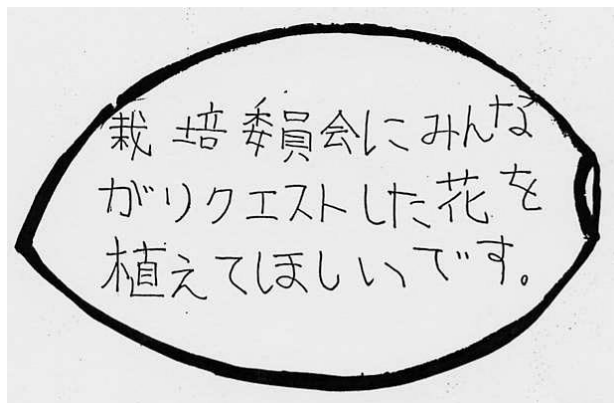
また、後日アンケート調査を行い、児童会員の意見が委員会引継集会の見直しに活かされていたか意識調査を行った。児童会員からの意見も聞いて、活動内容をつくっていく集会活動のもち方については、「学校の一員という自覚をもてる。」「学校を自分たちの意見で直していけるから、意見が聞けてよかった。」という回答が見られた。

委員会引継集会后に行った代表委員会では、各委員会の委員長から、意見交換や質問の中で出されたことや「宮二の種」に書いてあった要望を受けて、新しい委員会の活動を工夫することができた(資料8)。

栽培委員会…「みんなにどんな花を植えてほしいかリクエスト箱を作りたい。」

学級委員会…「次の集会は豆まき集会だが、その前にもう一つ新しい全校集会をつくりたいので宮二の木で意見を集めてみたい。」

資料8 「宮二の種カード」にあった児童の記述



このように「木の実カード」や、代表委員会の話し合いの中で生まれた「宮二の種」は、一つの集会活動の感想にとどまらず、関連する委員会活動に活かすことができた。

2 今後の課題

「木の葉カード」を整理し、活動の工夫について代表委員会で話し合ってきた。その中で、改善や新しい取組を考えてくれたカードの意見に目が奪われがちになっているようであった。はじめに自分たちで考えて提案した活動の工夫、それに賛成してくれた多くの意見の重みが、やや軽くなりがちであった。

また、全校児童約700人の意見をどのように話し合いの中で整理したか。集会活動を楽しみに意見を出してくれた児童に理解してもらった上で集会を開かないと、せっかく意見を出したのに、私の意見は聞いてもらえなかったという感じを与えてしまうと考える。話し合いや意見集約の過程、カードの整理の仕方を明確に伝える手だてをさらに工夫していくことが必要であると考えられる。

<参考文献>

- ・成田 國英・中島 直孝・斉藤 隆士 編著 『新しい特別活動、よい活動の条件』 東洋館出版社 (1991)
- ・宮川 八岐 編著 『特別活動 基礎・基本と学習指導の実例 ―計画・実践・評価のポイント―』 東洋館出版社 (2002)

(担当指導主事 阿部 泰博)